大会参加レポート
東日本大会 2004
2004 年 11 月 7 日

強すぎる！ヨーロッパ！

木村佳司

強い！ やっぱり強いヨーロッパ勢。日本勢が有利と言われる愛知で圧倒的な力の差を見せた。これから半年でどれだけ差を縮めることができるのだろうか？

ジャパンチャレンジ 2days 東日本大会
2004 年 11 月 7 日（日）愛知県下山村

今の力では通用しない

日本勢に有利と言われる愛知のテレイン。しかしヨーロッパ勢と日本勢の力の差は歴然だった。がっくし。

ここ数年、愛知での大会や練習会が続いている。これに何度も参加している日本選手のほうが地図と現地との対応が取り易い。

しかし、世界レベルの選手はそれを上回る強靭な体力を持つだけでなく、愛知のテレインにも対応できるバツグンのナビゲーション能力を持っていた。

東日本大会女子選手権の優勝はスイスのシモーネ。2003 年地元スイスでの世界選手権 4 種目完全制覇はあまりにも有名

男子選手権結果

1	ヤニ・ラカネン	1:32:58	FIN
2	マッツ	1:36:07	SWE
3	ヨルゲン	1:36:52	NOR
23	高橋善徳	1:52:28	ときわ
26	松澤俊行	1:54:47	三河

女子選手権結果

1	シモーネ・ルーダ	1:06:28	SUI
2	カロリーナ	1:07:15	SWE
3	ミンナ・カウッピ	1:10:43	FIN
18	番場洋子	1:25:39	白樺
22	宮内佐季子	1:27:13	ぞんび
23	落合志保子	1:27:54	ルーパー

世界と日本のレベル差は今に言われ始めた事ではない。しかし 2005 年に地元愛知で開催される世界選手権において、日本はリレー6 位入賞を目指す。だが、その壁はまだまだ高いと言わざるを得ないのだ。あと 9 ヶ月で結果を出すには何をすれば良いのだろうか？

日本で戦うなら、地図読みのハンデは無い。今の日本と世界の差が、主に体力的なものであるとするならば、体力的にも差の出にくい種目をターゲットにして強化するべきなのだろうか。

事実、日本選手はスプリント種目では、今までも比較的良い成績を残している。それならば徹底的にスプリント種目に絞った練習をするのも、ひとつの方法である。

陸上競技の指導者によるスピードトレーニング、スプリント用の高品質地図によるハイスピードなレース機会の増加。スプリント種目なりのレース運びの体得などなど。思いつくままに書いてみた。

スプリント種目では世界に迫るものの、ロング種目では世界のカベはまだまだ高い。
写真は前日の PWT 大高大会。パシ・イコネン（フィンランド）と熱戦を繰り広げる山口大助。

納豆走法

東日本大会 M40A クラスに筆者・木村も参加した。コースを走っていると、選手権を走るヨーロッパの女子ランナーと併走することがあった。女子のトップでもないので、飛びぬけたスピードは感じない。しかし登りでもスピードが落ちず、レース速度に大きな変動がない、納豆のような粘り強い走りをしていた。彼女たちの強さがここにあった。

まだ愛知のテレインに慣れていないらしくマップコンタクトに手間取っていた。これからトレキャンプで愛知を知り、これからもっと速くなってゆくことだろう。そう、2005 年では彼ら、彼女らはもっと強くなって日本にやってくるはずだ。

各種企画の遊園地

今回のジャパンチャレンジは各種企画がめじろ押しだった。

土曜日はトレイル 0 に始まり、世界の選手が目の前で競うパークワールドツアー、最後は公認ミドル大会。日曜日は学生選手権ロングディスタンス競技と東日本大会が併催された。9 ヶ月後に迫った愛知世界選手権のプレイベントにもなっており、日本でのトレーニング機会を求めて多くの選手が来日した。

このため参加人数も多く、イベント自体は素晴らしく盛り上がったものになった。インカレに集まった学生たちが世界からのゲストに対しても暖かい拍手を送った。ゲストも日本の学生パワーを目撃した。

こうしたイベントを開催するにあたって、関係者の努力は並ならぬものがあっただろう。しかし逆を言うと、これだけの企画がめじろ押しだったにもかかわらず、一つの会場で実施できてしまった。やはりオリエンテーリングの競技人口は減少しているのだということを感じてしまう。

はっきり言おう。大規模オリエンテーリング大会の魅力を単独の組織で提供できる時代は終わった。もはや過去には戻れない。

現実に高品質の地図を作り、高品質の競技環境を用意するにあたっては、ある程度の規模が必要である。この規模を維持するためには、各種組織の垣根を取り払って、このようなコラボレーションを進めてゆくことが必要だろう。今回、非常によい成功例ができたと思う。

（木村佳司）